

クサビ締め太鼓の分布と民俗文化の地域性

小島 美子

はじめに

- 一 日本のクサビ締め太鼓の構造と分布
 - 二 日本以外のクサビ締め太鼓の構造と分布
- おわりに

論文要旨

日本の民俗文化の地域性について考える場合、大きくはまず西日本と東日本という二つのグループに分ける考え方が一般的である。しかし日本民謡の音階分析の結果、西日本と東日本の差よりも、日本列島を中央の山脈で縦に分けた太平洋側と日本海側という二つのグループの違いの方が、むしろ強く現われる傾向があることがわかった。そのため本稿ではクサビ締め太鼓の分布を、日本と海外の諸民族について調べ、その分布から日本の民俗文化の地域性について、やはり同じ傾向が見られることを示し、日本文化の形成の問題にも少しふれた。

日本の太鼓は基本的に二面相似の太鼓であるが、皮の張り方、締め方、胴の形などで分類される。クサビ締め太鼓は枠のない締め太鼓で、締めひもの間にクサビを入れてひもを締め皮を強く張るタイプの太鼓である。この種の太鼓は奄美諸島北部で現在も多く用いられている。おそらく古くは沖縄文化圏全体に

広がっていたようで、現在でも与論島、波照間島などで使われているが、その中で奄美諸島北部でとくに様式化されたものと考えられる。

また千葉県千倉町白間津や山梨県秋山村無生野の芸能でも、大型のクサビ締め太鼓が使われている。さらに韓国の済州島や、中国とタイのヤオ族、タイのアカ族、インドなどでも使われている。とくにヤオ族やアカ族のものは、クサビを盛大に使っており、基本的な構造が白間津の太鼓と共通である。この照葉樹林文化の故郷のようなところは、一大楽器製作センターでもあり、このクサビ締め太鼓もここがオリジンだったと考えられる。

それがおそらく民間レベルのルートで日本に伝えられたのではないだろうか。本土と南島との先後関係は不明だが、この太鼓は照葉樹林文化と日本文化を結びつける一つのキーワードである。そしてそれが西日本ではなく、東日本の太平洋側に堂々と残っていることが注目されるのである。